

# 日文研と私

## ー「日本人論」から「日本から見た世界」の研究へー

フレデリック・ディキンソン

### 序

日文研と私との関わりは、2011年の夏、戸部良一教授主宰の共同研究「近代日本における指導者像と指導者論」に参加したときに遡る。1年間外国人研究員として日文研に滞在したのちも本共同研究は続き、研究成果は『近代日本のリーダーシップ：岐路に立つ指導者たち』（千倉書房、2014年）として刊行された。私は戦間期に首相を務めた浜口雄幸を論じる一文を寄稿した。日文研との関わりはまだ日が浅いものの、みずからの研究史を顧みるともっと長期にわたっての関わりがあるように思われてならない。日文研が京都の地に設立を見たのは1987年5月のこと。そのちょうど10か月前、私は日本の歴史と政治学専攻の大学院生として研究者の日々を京都大学で歩み始めた。つまり、日文研も私も、1980年代の産物なのである。

### エキサイティングな1980年代

1980年代の日本は、高度成長期の真っ最中で、日文研も私もやる気満々だった。当時の日本はそれまで主流だったマルクス主義的分析から保守本流の優位へと移り変わり、日本論が盛んに唱えられた時期でもあったので、従前の西洋の歴史に依拠するような日本研究ではなく、自分たち自身で自信のある歴史を作ろうという流れが強かった。この傾向は日文研の設立時の根本的な発想にもうかがうことができる。1990年に日文研から出された公式文書の中には「われわれは日本の文化を深く研究して、その優れた特色を外国人に知らせなければならない」という趣旨の、大胆と形容してよいような文言が見られる。こういう姿勢は、日文研の主要な研究活動である共同研究の諸テーマにも見てとることが可能だ。すなわち、設立間もないころの共同研究から拾うならば、「日本文化の基本構造とその自然的背景」あるいは「日本人の自然観」、「日本の想像力」という大変興味深いものがいくつも見られる。

同時代の太平洋の彼方、すなわちアメリカへと目を転じてみれば、日本研究の二つの流れを見て取ることができよう。一つ目は、隆盛になりつつあった地域研究（area studies）だった。地域研究は第2次大戦後にアメリカがグローバルに世界各国に関わる中で、非西洋諸国の研究を政府が後押しする形で開始を見た研究手法だった。私の研究者としての第一歩も、この地域研究の手法で始まったと言ってよい。ノートルダム大学に学ぶ2年生だったとき、上智大学での1年間の交換留学プログラムに参加し、日本の言語、文化、歴史、政治等々を集中して学んだ。このプログラムの特徴は、比較の視点

にさほど立つことはなく、当時日本を席卷していた日本人論が強調していた日本のユニークさに力点がおかれていたということにあった。

もう一点、研究者としての私が出来上がる過程で影響を受けたのは、1950年代にアメリカの社会科学で隆盛だった近代化論というアプローチであり、1960年代にはアメリカの日本専門家たち (Japan specialists) が用いることになった。近代化論者としてはイエール大学のホール (John W. Hall) やプリンストン大学のジャンセン (Marius B. Jansen) たちがよく知られており、ジャンセン編の *Changing Japanese Attitudes toward Modernization* (Princeton University Press, 1965) 以下数冊が成果として刊行されている。近代化論は、京都大学の大学院で高坂正堯教授のもとで学び修士論文を書くにあたり、私自身も参考にした手法だった。近代化論には、のちに日文研で基本的な目標とされた、日本の優れた諸特徴の研究と相重なる点があったが、左翼が示した暗い物語をもっと積極的な近代日本で置き換えよう、ということである。私はといえば、修士論文で日米関係史を扱ったが、日米安保体制を正当化する前提で、マルクス主義的な悲観論よりもっと楽観的な日本像となった点には近代化論に似たところがある。

## 変わりゆく日本像—1990年代

1990年代は、日本及び日本研究双方に大きな変化をもたらした。保守本流の楽観論から悲観的な分析へと移り変わることであった。その傾向は日文研の共同研究に現れた、以前とは異なる傾向にも見て取ることができる。すなわち、従前の人文科学的テーマからより社会科学的なものへと移行したのである。「近代日本の女たち：その表象と自己表現」、「転換期における法と社会」、「大正期総合雑誌の学際的研究」などに、変化をうかがい知ることが可能だろう。

同時代のアメリカでの日本研究の傾向は、ポスト近代化論と呼べるものだった。アンドルー・ゴードン (Andrew Gordon) やシェルドン・ギャロン (Sheldon Garon) の諸研究が典型的な例であろう。ゴードンの *Labor and Imperial Democracy in Prewar Japan* (University of California Press, 1991) や、ギャロンの *Molding Japanese Minds: The State in Everyday Life* (Princeton University Press, 1997) という著作は、そのタイトルからして日本に対してゆがんだとは言わないまでもかなり悲観的な態度あるいは分析を予感させる。ゴードンの著作に関して言うならば、20世紀の日本は imperial democracy であるという。Imperial とは英語話者にとってはよい響きとは無縁の語であるため、imperial democracy には本物の democracy ではない、という暗示がある。また、ギャロン著については、タイトルの molding の語がすべてを暗示している。つまり、日本人の思考が政府により型にはめて作り上げられてきた、ということであり、日本社会は本当の自由より遠く離れている、というメッセージが伝わってくる。もちろん書籍のタイトルは出版社の編集サイドがつけた案かもしれないが、一概に著者の意向とは言い切れないものの、明らかに以前とは違う日本への眼差しを感じさせるタイトルに仕上がっていた。

京都大学大学院を修了後、私はイエール大学へと進み、1993年に博士論文を完成した。この学位論文をもとにした最初の単行著作が *War and National Reinvention: Japan in the Great War, 1914-1919* (Harvard University Asia Center, 1999) である。この書は、戦前日本社会の「矛盾」(ゴードン)や戦争期への円満な移行(ギャロン)を主題とするような内容ではもとよりない。しかし、第一次世界大戦時の日本の政治の激動期に焦点を当てたことにより、修士論文の比較的明るい見通しとはかなり異なった論考となった。

## 21 世紀の日本

いわゆるバブル経済が1990年代初めに崩壊し、その後長引く不景気が日本を襲うこととなる。こうして生じた「失われた世代」が日本研究の場でも大きな変化を生むに至った。この世相を背景にして悲観論から多様性への流れが生まれ出たのである。ここでまた日文研の共同研究に目を向けてみるならば、地域研究や比較の視点に立つ研究が増したことは明らかである。たとえば「文明交流圏としての海洋アジア」、「アジアにおける家族とジェンダーの変容」、「日中学術概念史の比較的研究」があり、21世紀になってからの日文研の共同研究の典型を表している。

他方、アメリカにおける日本研究はグローバルな視点を持つようになる。「グローバル」というと、「世界から見た日本」という視点を直ちに想起するだろうが、「日本から見た世界」という視点もある。双方の視点を合わせれば越境的な(transnational)視点と形容できるだろう。そういう越境的な視点を持つ代表的な日本研究をいくつか挙げてみたい。ミリアム・キングズバーグ(Miriam Kingsberg)の *Moral Nation: Modern Japan and Narcotics in Global History* (University of California Press, 2013) は、20世紀の覚醒剤問題を扱っている。日本が、世界の覚醒剤中毒の基準設定に大きな貢献を果たしてきたという主張だが、グローバルな観点を持つ日本研究の典型例ではないかと私は考えている。

マーク・メッツラー(Mark Metzler)の *Capital as Will and Imagination: Schumpeter's Guide to the Postwar Japanese Miracle* (Cornell University Press, 2013) は戦後日本の経済を扱う。メッツラーは、日本の経済は好景気の折も不景気の折もじつは世界経済の今後の流れを予測している、と強調する。アメリカもフランスもイギリスもいずれ日本のように好景気から不景気への運命をたどる、というのが著者の見解である。

また、ラン・ツヴィゲンバーグ(Ran Zwigenberg)は *Hiroshima and the Rise of Global Memory Culture* (Cambridge University Press, 2014) において、広島への原爆投下を取り上げている。被爆により日本は惨害を被ったに止まらず、全世界が戦争の被害者を追悼する基準の設定にも大きく貢献してきた、という視点を掲げている。ヒロシマの話は日本国内の話だけでなく、世界にとっても注目に値する大きな事件ということとなる。これこそ、越境的なグローバルな視点に立つ日本研究と言えるであろう。

## 日本と第1次大戦をグローバルな視点で捉えるために

日本専門家としての私自身の研究上の主たる関心は、第1次世界大戦にある。従来の研究には、第2次世界大戦の原点として第1次世界大戦を見る、という視点をとるものが主流だった。その代表とも言えるのは、今や古典となっているフリッツ・フィッシャー（Fritz Fischer）の *Germany's Aims in the First World War*（W. W. Norton, 1967 独語版は1961）であろう。日本の学界においても最近第1次世界大戦の研究が盛んだが、第2次世界大戦を知るためには1914年～1918年間の流れを知ることが必要不可欠、というスタンスをとる傾向が今なお強い。フィッシャー以来の学風がまだ残っていると言えよう。

しかし、欧米の学会においてはより広い見取り図のなかで第1次世界大戦は20世紀の原点でもある、という主張もされてきた。チャールズ・メイヤー（Charles Maier）の *Recasting Bourgeois Europe: Stabilization in France, Germany, and Italy in the Decade after World War I*（Princeton University Press, 1975）がその代表であろう。

日本研究者としての私は、第1次大戦のより広い見方は他にもあると考える。それは、「世界を動かした第1次世界大戦の日本」とまとめてよいだろう。第1次大戦の歴史をみれば当時の日本の世界的な位置、あるいは日本の世界のなかにおけるパワーの大きさが分かる、という視点である。

これについては、すでに数年前に上梓した *World War I and the Triumph of a New Japan, 1919–1930*（Cambridge University Press, 2013）で詳しく論じた。周知のように、第1次大戦ののち日本は産業国家として繁栄し、さらに世界の大国ともなった。大国と認められるに至った理由についてはあまり知られてはいないが、大戦中、日本はイギリス、フランス、アメリカ等、同盟国のために大きな貢献を果たしたためだった。具体的には、日本海軍は、地中海でドイツの潜水艦と戦い、太平洋ではドイツ海軍を追い払い、またロシアに向けては多くの武器を送っていたのである。こういう背景があったからこそ、大戦後に日本は五大国の一員となったのだった。

これが契機となり大戦直後から1920年代の日本も、大戦前よりもずっと大きな役割を世界の舞台で果たすこととなった。パリ講和会議での五大国の一員としての活躍、国際連盟での加盟国になったこと等々である。アメリカがまだ国際連盟に加わることが出来ない中で、日本は加盟国になるに止まらず常任理事国にも名を連ねた、というのは大変意義深いことである。続くワシントン会議でも、ロンドン会議でも、世界の大国として日本は重きをなした。第1次世界大戦を日本との関係で見直してみるならば、その新たな意義が浮かび上がってくるであろう。第1次大戦を第2次大戦の原点ととらえるだけでは決して見えてこない世界史の真実である。

## 結びにかえて

前述のように日文研発足時は、日本人論が隆盛の時代でもあった。その世相は日文

研の推進した共同研究のテーマにも如実に現れていた。1980年代は、日本を語るとき、学問の世界においても日本の uniqueness を語る傾向が強かったのである。しかし、30年を経た今日、日本の uniqueness を語るだけでは世界では通じない。世界に向けては、今の世界を知るためには日本の歴史を知る必要がある、というスタンスをとることが必要なのである。

20世紀は西洋の上昇の物語、とされる。しかし、先に見たように第1次大戦時とその後の1920年代の日本の活躍があったからこそ、第1次大戦後の世界のシステムが構築されたことが分かる。近代日本の歴史に目を向けることで、これまでの西洋の上昇という物語がもっとグローバルな物語へと展開していくのである。また21世紀はアジアの時代であると言われる。そこには大国としての中国の上昇の物語があるが、20世紀からの連続を視野に入れるとき、近代日本の果たした役割が大きいこともまた看過できないことは言うまでもない。